



賴木德富猪一郎監修
崎愛吉共編

賴山陽全書

昭和七年七月十五日印刷

賴山陽全書〔全集下〕

昭和七年七月二十一日發行

廣島縣廳內

發行者 賴山陽先生遺蹟顯彰會

代表者 大田清

東京市京橋區銀座西七丁目一番地

印刷者 大谷仁兵衛

東京市京橋區銀座西八丁目五番地

印刷者 渡邊安雄

東京市京橋區銀座西八丁目五番地

發行所 廣島縣廳內 賴山陽先生遺蹟顯彰會

電話
替
下關六三三〇番
五七八八番

刷印會學政行方地國帝民
刷印所社友

賴山陽全集 下卷

總 目

春秋遼豕錄〔未刊本〕

序說

隱公

桓公

莊公

閔公

僖公

文公

宣公

成公

襄公

昭公

孟子評點〔未刊本〕

卷之一

梁惠王章句上

梁惠王章句下

卷之二

公孫丑章句上

公孫丑章句下

卷之三

滕文公章句上

滕文公章句下

卷之四

離婁章句上

離婁章句下

古文典刑

卷上

檀弓

重耳答秦

曾子易簮

獻文子成室

考工記

序工梓人

趙文子知人死於虎者

孟子

魚熊掌

彭更

齊人

荀子

持國

莊子

對東郭子

庖丁

南伯子綦

罔兩問景

卷之五

萬章章句上

萬章章句下

卷之六

告子章句上

告子章句下

卷之七

盡心章句上

盡心章句下

書孟子評點後

列子	天地無全功	
韓非子	齊桓公論	管仲論
孫子	軍形	
尉繚子	制談	
卷中		
左氏	北制之戰	繻葛之戰
公羊傳	陳乞	曹刿
穀梁傳	晉滅虞	董狐
國語	叔向賀韓宣子貧	
戰國策	趙奢田單論兵	齊鄒忌說威王
孫臣諫魏王		

史記

鴻門之會

垓下之戰

韓信破趙

衛青擊單于

漢興以來諸侯年表第五

河渠書

淮陰侯傳贊

卷

下

春秋文

絕秦書

與范宣子書

戰國文

答燕惠王書

秦文

諫逐客書

西漢文

伐項羽檄

賜尉佗書

求材詔

過秦論

東漢文

治安策

貴粟疏

答任安書

答孫會宗書

通計

五十三篇

小文規則

敘遊

紀別

題名

書後

識事

簡牘

銘贊

謝選拾遺

卷之一

小字集

卷之二

技字集

卷之三

於字集

卷之四

道字集

卷之五

未字集

卷之六

爲字集

卷之七

尊字集

唐絕新選

卷上

卷下

書唐人絕句新選後

宋詩鈔

卷一 五古 卷四 五律

卷五 七律

卷六 七律 卷八 五絕

浙西六家詩評

卷之一 樊榭山房詩 蘆鶚

卷之二 海珊詩 嚴遂成

卷之三 丁辛老屋詩 王又曾

卷之四 蘇石齋詩 錢載

卷之五 小倉山房詩 袁枚

卷之六 有正味齋詩 吳錫麒

韓 蘇 詩 鈔

卷一 五古 韓昌黎

卷三 七律 韓昌黎

卷二 七古 韓昌黎

卷一 五古 蘇東坡

卷三 七古 蘇東坡

陶 詩 鈔

麝 囊 小 結

未刊本

賴山陽先生一夜話

未刊本

藝 圃 著 談

未刊本

圖 版 目 次

春秋遼豕錄〔講義錄筆記〕原本

『書經』講義の禹貢地圖

『古文典刑』原本

『麝囊小結』〔錦繡段選選〕原本と跋

宋詩鈔評本

『讀書』八首の内 詩幅

春秋遼豕錄

『春秋遼豕錄』解題

未刊本

賴山陽ノ經説、ソノ要略ヲ窺フニ足ルベキモノ、主トシテコレヲ本書ニ求メザルヲ得ズ。他、「書經」・「易經」等ノ如キ、皆ソノ研究ノ事實ニ就キ、徵證セラルベキ資料ノ、幾多書翰ノ上ニ存スルモノアルモ、而モソノ在世、コレヲ整錄スルニ及バズシテ已メリ。

ヒトリ『春秋』ノ一書、亦未ダソノ完稿ヲ告グルニ至ラズ、魯十二公中、ソノ二ヲ餘スニ止マリシモ、幸ニシテ聽講者ノ手ニ存錄セラレ——事實ハ夫子自身ノ手ニ成リシモノナルベケレド——「十ヲ以テ二ヲ推シ」得ベキナリ。更ニコレニ加フルニ、『書後』ノ中ニ就キ、ソノ經説ニ關スルモノヲ採リ、併セテソノ意ノ在ル所ヲ求ムレバ、一家ノ經説ハ、ソノ大旨ヲ微シ得ベキニ庶カラン。

今、コノ稿本ニ跋スル所ヲ見ルニ、我ガ國體上、「最モ識ラザルベカラザル」モノトシテ、諸經ノ中、特ニ先ヅ——「自隱公」以下。世道衰微。史失其官。於是孔子懼而脩之。

自惠公以上之文無所改焉。自隱公以下則孔子以己意脩之。所謂作春秋也。」『春秋』擇比、孔子が脩史ノ本義ヲ究ムベク、天保元年「五十一歳」ノ頃ヨリ著手シテ、ソノ研究シ得タルヲ整錄セシムルニ至リシヲ知ルベシ。

是レヨリ先、ソノ研究上ノ手段トシテ、先ヅ廣ク諸家ノ成説ヲ検討シ、「康熙ノ彙纂ハ、群説ヲ一覽〔通覽〕スベキモ、然モ亦各本書ヲ観ント欲シ、納喇成德「清・納蘭性德」ノ〔通志堂〕經解ニ就キ、コレヲ検出スルニ、堆帙等身ニシテ、盡ク讀ムコト能ハズト雖モ、而モ各大旨ヲ領セリ、唯、宋ノ黃仲炎「春秋通說」・元「明」ノ趙汸「春秋集傳屬辭」ガ説ク所ハ、頗ル直截ナルヲ覺エ、後ニ清ノ萬斯大ノ隨筆「春秋」未完本・方苞ノ「春秋」通論」ヲ得タリシニ、『通論』ハ趙ノ意ニ本ヅケルニ似テ、而モ較簡明ナリ、ソノ他ハ率々公「羊高」・谷「穀梁赤」・胡「安國」ニ出入シテ、枝蔓繆轢ナリ。否ラズンバ則チ務メテ相排撃シ、毛奇齡「經集ノ中」ノ如キニ至リテハ、横サマニ目例ヲ立テテ、ソノ辨博ヲ逞シクスルノミ」ト曰ヒ、ココニソノ手段ヲ轉ジテ、「姑ラク諸傳ヲ閲キ、獨リ正文ヲ熟觀ス

ルコトトナセルモ、左氏ヲ用キテ案トナサザルヲ得ズ、猶時アリテハ、ソノ妄ナルヲ覺エタリ、何ゾ況ンヤソノ佗ヲヤ、要ハ、特リコレヲ臆ニ取り、心ノ安ンズル所ヲ求ムルノミ」ト述べタリ。

此クノ如クニシテ、遂ニ獨自ノ見解ニ本ヅキ、一家ノ學說ヲ披瀝スルニ至リ、「コレヲ精ニ失スルモ、而モコレヲ粗ニ得、證ニ誤ルモ、而モコレヲ臆ニ中ル」アランコトヲ言ヘリ。是レ豈、自家獨特ノ經說ヲ發表シタルモノニ非ズシテ何ゾヤ。

試ミニ當年ノ學界ヲ通觀セヨ、誰カコノ言ヲ聞キ、ソノ耳ヲ聳タシメザルベキ。世ヲ舉リテコレヲ註疏訓詁ノ上ニ求ムルニ汲々トシテ、考證辨博、ヒタスラニソノ長ヲ示サントスルニ力メ、徒ラニ字句ノ末節ニ拘泥シテ、經旨ノ大本ハ知ラズ々々コレヲ捕捉ノ外ニ措クヲ免カレザルガ如キモノ、ソノ幾許ナルヲ知ラズ。コノ間ニ在リテ、吾レハ獨リソノ圈外ニ立チ、而モ古經文視ノ信條ヲ握リツツ、一ニ經旨ノ闡明ヲ主トシテ、自家ノ學說ヲ發揮シタルナリ。

山陽ハ、寛政九年八歳〇十ノ春、季父杏坪ニ伴ハレテ江戸ニ游學シ、昌平坂學問所ニ入り、
 嫁夫尾藤二洲ノ家ニ學ビ、傍ラ服部栗齋ノ麴溪書院ニ就キ、ソノ學說ヲ聽ケリ。栗齋
 「六十二歳」ハ山崎闡齋學派ノ名家トシテ著聞シ、春水ノ藩命ヲ以テ頻々江戸邸ニ于役
 スルヤ、毎ニ經義ヲ質證シ、杏坪亦ソノ江戸在府ノ日ニハ、親炙、門人ノ禮ヲ執リ、ソノ
 講說ヲ筆記シタルモノ多カリシナルベク、山陽ガ十六歳ノ時、ソノ同窓石井豊洲ニ寫示
 シタル、「周子大極圖說〔講義錄〕」ノ如キ、蓋シ傳家ノ原本ニ據リシヲ疑ハザルナリ。予
 ハ近ゴロ偶然、山陽ノ族兄養堂「竹里」ノ遺書ヲ獲タルニ、亦ソノ原本ノ手寫ニ成レルモ
 ノノ如キヲ見タリ。

寛政二年、杏坪「卅五歳」ノ廣島ニ歸ラントスルヤ、栗齋ハ爲ニ送序ヲ作リテ曰フ、
 「狂狷ハ入聖ノ資ナリ、狂狷ニシテ裁スルアル、摹倣中行、陷リテ德ノ賊トナルニ愈
 ラズヤ。伯夷・伊尹・柳下惠ハ聖人ナリ、而モ且巧力兼ネ至ル能ハズ、イヅクンゾ備
 ハレルヲ夫人ニ責メンヤ、「孔門」七十子ノ徒、ソノ紕繆ノ多キ、或ハ後世庸人ダモ
 爲サザル所ノモノアリ。君子ハソノ過ヲ觀テ、斯ニ仁ヲ知ル。今ノ士大夫ハ、彌縫

周ネク至リテ、罅漏ヲ露ハサズ、陳熟老成ニシテ、千百人、一ノ如シ……奚ゾ貴ブニ
足ラン……。嗚呼、仁、遠カラシヤ、巧言令色ニ鮮クシテ、剛毅木訥ニ「仁ハ」近シ。
學者コレヲ知リテ、然シテ後、以テ德ニ入ルベキナリ。前人、コレ「コノ意」ヲ廣メ
テ曰ヘリ、學者、宜シク眞丈夫タルベシ、僞道學タルコトナカレ。」

是レ「中行不可ニ必得」其狂狷乎。鄉愿德之賊也」ノ本文ヲ敷演シタルナリ。杏坪ニ教フ
ル所、即チ山陽ガ栗齋ニ受ケタル心法ノ在ル所タラズンバアラズ。

栗齋ノ「行狀」ニ曰フ、

「先生ノ人ヲ教フル、循々トシテ序アリ、……コレヲシテソノ文義ヲ會スルヲ知ラシメ、然シテ後、四子・六經・
近思〔錄〕ノ旨ヲ推極セシム……蓋シ字句ニ法アリ、篇章ニ則アリ、ソノ法ヲ得レバ、則チココニ以テ書ヲ讀ム
ベシ、能ク書ヲ讀メバ、則チ道、ソノ中ニ在リ。故ニ曰フ、未ダ〔文〕辭ニ得ズシテ、而シテ能ク〔經〕意ヲ得ルモノ
アラズ。崎門ノ先達ハ、讀書、密且博ナラザルニ非ズ、但、道ヲ求ムルニ急ニシテ、而モ背ヘテ志ヲ字句ニ遯セ
ズ。ココヲ以テ精義ハ神ニ入ルモ、而モ文ニ於テハ疎漏ナキ能ハズ。後輩ノ虚遠ニ馳セテ、字句ヲ視ルコト、
弁髦ノゴトクナルハ、此レ吾黨ノ大患ナリ。」

以テ栗齋ノ家學ガ、他ノ闇齋學派ト、ソノ流ヲ殊ニスルヲ見ルベシ。山陽ノ經說、先づ